「日本文化の源泉としての磐座・磐境（五）

六甲山・三国岩の磐座

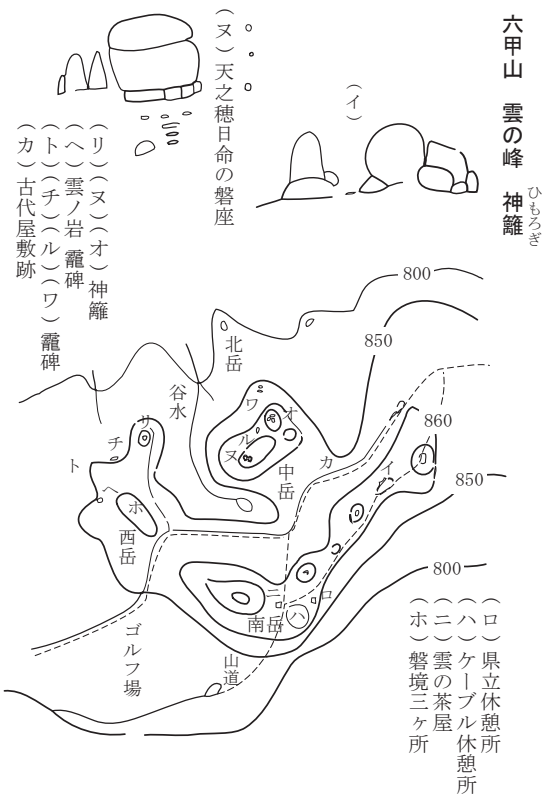
ＮＰＯ古代遺跡研究所 所長　中島 和子

「六甲山は神の山」

いつのころからか「六甲山は神の山」と囁やかれてきた。その根拠ははっきりしないが、その囁きが大声に変わったのは、阪神大震災の時だった。日本には古来、人知を越えた疫病の流行や天災の発生を人の世に対する神の警告とみる思想があった。為政者は早速、祭りを行い神意を伺って過ちを正したという。戦後、人間の便利の為とは言え六甲山を南北に縦断するトンネルを複数掘りさらに阪神間に新幹線を走らせるために巨大トンネルを東西に掘り進んで、六甲山の体内は文字通り縦横無尽に破壊され、山上には森林を伐採してゴルフ場をはじめ三〇〇をこえる会社の施設が立ち並ぶに至った。これでは神の山でなくても、山が怒るのは当然と言えよう。

では「神の山」とはどういう意味だろうか。「山が神」とか「山が御神体」とは良く聞く言葉である。たとえば奈良の大神（おおみわ）神社は、後ろの三輪山を御神体とする信仰である。カイラス山を神と崇めて、その巡礼に命を賭けるインドとチベットの人々の列は絶えることがない。日本でも古くから神奈備山（かんなびやま）として尊ばれた山があった。後には山岳信仰となり、修験道が生まれた。

ところで、これらの山は、高く美しくまたは険しく厳しいが、その外観によってではなくそこには共通して古代縄文人の建てた神座すなわち磐座が存在するのである。三輪山をみると、古代に神の降臨を祈願した磐座がある。奥津磐座には大物主（おおものぬし）命、中津磐座には、大己貴（おおなむち）命、辺津磐座には少彦名命の降臨された尊い磐座である。裏山には磐座があるから神社に本殿は要らない。大神神社にとって裏山の磐座が本殿なのである。その磐座に神が降りられるから、その山は「神の山」なのである。「御神体」と言う表現は、江戸時代以降のものである。ところで、



出典　荒深道斉「拳て磨け八咫鏡」第21図 168頁

磐座のある山は、「神の山」と呼ばれている山だけではない。日本全国の高く見晴らしの良い山や岬にも往々にして磐座の跡がみられる。

では六甲山には、どのくらい磐座があるのだろうか。

古事記研究家として磐座を踏査した荒深道斉（あらふかみちなり）翁は、その数の多さと壮大さに圧倒されて、六甲山は「まるで磐座の展覧場の如し」と発表し、昭和七年にこれらの保護を求めて、「六甲山神代遺跡保存会」の設立を提唱した。[注①] その趣意書をみると、その時までに見つけられた磐座は、西六甲の三国岩と二つ岩、中岳の雲の岩と雲の峰の神籬（ひもろぎ）、東山麓のこしき岩と麓麓荘町の古墳群、芦屋奥池の剣岩とその直下の鏡岩、甲山周辺の磐座群などすでに紹介した大方を見つけられていた。[注②]

ケーブルは既に敷かれていたとはいえ、当時は、山上の道なき道を和服姿に登山帽、ステッキで蜘蛛の巣を払いながら憑かれたように磐座求めて藪の中、林の中を探査する荒深翁とその弟子一行の姿が目に浮かぶようである。

古典における六甲山の位置

ところで、数多くの磐座のなかに、この山のもつ特別な意味を表示しているものがある。それは現在カントリーハウスの丘の上にある「天穂日の命（あめのほひのみこと）」の磐座で、荒深翁の初期の論文には「中部六甲の雲の峰の神籬」（前頁参照）とある。地主である阪神電鉄の話ではここに人工スキー場を作るときに岩を大幅に動かし排除したということで、荒深翁のスケッチに比べると、現在の岩の数や配置は変わっているが、中心をなす磐座の堂々の威風は損なわれていないようだ。荒深翁の描がれた図は、この磐座を基点として半径五〇〇米の東西南北に磐境を建てて中垣とし、さらに四方一〇〇〇米ほどの所に外磐境（外垣）を置き、その外側には多種多様の磐境が置かれていたという壮大な神域であった。（第一図）[注③]

第一図　天之穂日命の磐座

では、何故六甲山に天の穂日命の磐座があるのだろうか。古事記によれば、天之穂日命は、天孫降臨に先立って、地上の騒ぎを静めて人間の住める世にするために地上に遣わされた神である。

「豊葦原の中つ国に遣わせる天菩比（あめのほひ）神」[注④]であってその降りられた所は、中つ国すなわち当時の日本本土の中央部で、それが丁度、六甲山に当たると言われている。奇しくも六甲山麓の芦屋市の芦屋神社には天之穂日命が主たるご祭神として祀られている。大阪の天満宮のご祭神でもあるが、里宮としての芦屋神社の存在は、六甲山上の磐座との密接な関係を示すものとして注目に値する。

つまり六甲山は、後年、天孫和々岐命（てんそんににぎのみこと）が降臨されたと言う「筑紫の日向の奇古御岳（くしふるみたけ）」と並び立つ「神の山」なのである。

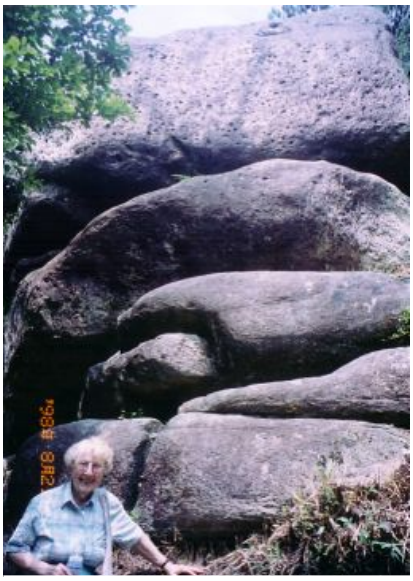
ところで、この尊い神の山の何処に、中心をなす太陽崇拝の磐座はあるのだろうか？

三国岩の磐座

六甲山の生成を一瞥すると、この山は瀬戸内海に沿って西南から東北に延びた幅約八キロ長さ約十六キロの山並みで最初の隆起は西北神戸の高尾山から再度山までの低丘だったが、次に摩耶山、石

南花山、西六甲山が隆起し、その後中央部の雲の峰周辺が盛り上がり、最後に東六甲の最高穂が噴火してその余力で高座山（黒岩山）や剣峰が噴火したのであった。

天之穂日命の磐座から旧六甲を目指して西進すると、やがて表六甲ドライブとの交差点「丁字が辻」に出る。ここで摩耶山へ向かう道路と別れて杉の木立の小道を奥へ数分行くと、右手にあっと驚く巨石建造物に出くわす。「三国岩（みくにいわ）」という立て札があり、見上げると礎石の上に巨石が四個、上へ行くほど岩は巨大となり、最高の岩は特別に大き



第二図　三国岩の岩門

く圧巻で正面（南面）には全面にわたって小穴が空いていて、瀬戸内海の波に洗われた聖なる岩を運んだと言われている。（第二図）高さ一〇米。その岩の頂上に登ると、岩は下で想像していたよりもはるかに大きく、横幅約五米、縦が約六米、そのうえ人工的な穴や線が彫られていて天文石の様相を示している。昔はこの岩の上から三国（菟原、矢田部、有馬の三郡）が見渡せたという。六甲山の名所の一つになっている。その巨大さは、東山麓の西宮市・越木岩神社の甑岩（こしきいわ）に匹敵するが、これもその甑岩と同じく、神籬全体から見ると南座であり機能的には岩門（いわと）である。またここには手力男命が降りられると言われている。

さて、岩門がこれ程に壮大なのだから、中の磐座（北座または奥座）は、如何ばかりかと奥へ進むと、昭和三年に建てられたという川西倉庫会社の邸宅に行き当たる。荒深翁の描写をみると

「終に川西別邸に入りて巨石群を発見した。既に数千年間神籬を忘れたる国民の不誠実のため顧みられず激雪豪雨のため原形を失せりと雖も、猶現時代の庭石の配置法を超越して太古の組方を遺せり」注⑤

荒深翁が初めて来られた日時は明らかではないが既に川西邸が建てられていて、磐座の荒れ果てた様子を慨嘆されている。しかしそこにはまだ巨石群が存在していたのである。ところが私が荒深翁の後継者である日立道根彦先生についてここを訪れたのは今から四十年前。その時には既に巨石群の姿は無く、川西邸の庭先の西北部の木立の奥に三石から成る磐座とその背後に残れる数石のみとなっていた。留守番夫妻の話では、家の建つ前には磐座の周辺には累々と岩が立ち連なっていたという。磐座は東に向かって建てられているので、日没の時には、その背後に落ちる真っ赤な太陽の荘厳さに思わず我を忘れたものだった。夏至のころには太陽の位置によって三石の内の右前の岩に彫り物が浮き出した。神の顔とその下の神代文字。由緒書きのようなものだろうか。（第三図）

二つの磐座

川西邸を挟んだ反対の東側には、少し高い所があって草むらになっているが、清澄な雰囲気に満ちていて、昔、磐座があったのではないかと思われる。地図をみると、ここは旧六甲山の最高穂で海抜八〇二・五米。しかも、先の磐座とはまっ直ぐ東西の関係にある。私はふと国見岳の二つの磐座についての中西旭先生の言葉を思い出した。

二つの磐座が東西に相対峙しており、「東側の磐座は、わずかであるが高位であり、下界が眼下に全望されると共に、風雪は直面

（まとも）に受ける状況にある。」

磐座の痕跡は無いので、大きさや形状を知ることはできない。また今では周辺に杉や檜が林立していて、外界を展望することはできない。しかし此処が旧六甲の最高穂と言うことには特別の意味があるように思う。尊い磐座を古い山穂の最高穂に建てるという考えは理に叶っている。実際、日の出の時に此処に立つと、林立する木立の間から豊栄（とよさか）昇る朝日が眩しいまでに真っ直ぐここを照らす。一方、中西先生は、西磐座については、次のように書かれている。

第三図　三国岩の西磐座
彫り物が太陽の位置によって現れる

「西磐座は、背後に潅木茂り、巨大石群もその頭部をだし、やや低位にあって頂上のすべてを引き込む体制にある。」また西磐座の前には祭祀の場があることも指摘されている。

これを三国岩の西磐座に当てはめると、東のそれと大きさを比較することはできないが、低所にあり深く樹木に包囲されていて展望がきかず、その前に広い祭祀の場がある。（その祭祀の広場に川西邸が建てられたのである）

東磐座にはご祭神の荒（あら）ミタマ、西磐座には和（にぎ）ミタマが祀られ、両磐座の神気が相呼応して、またとないまでに尊い神座を形勢していたと考えれる。この二つの磐座のあり方は、天照大御神を祀った伊勢神宮の建築様式に引き継がれている。また岩門に手力男命が降りられるのもご祭神が天照大御神なることを示している。

第四図　三石からなる三国岩の西磐座

九州のほぼ真ん中に位置し、もっとも古い地層である九州山地の主峰・国見岳の二つの磐座。南米大陸のほぼ中央に位置するマチュピチュ遺跡の老峰と若峰。六甲山の三国岩の二つの磐座。いずれも東西、または南北に相対峙する二つの磐座をもち、広地域における太陽崇拝の中心的神籬であると言えよう。三国岩の磐座は、阪神地区の中心か、近畿か関西の中心かについては、今後の調査を持たねばならない。

このあと川西邸はレストランとなり周囲の木立を切り倒した結果、磐座は丸裸かとなって見物に供されることとなった。嘆かわしいことである。巨大な岩門は観光の名所となっているので、よもや破壊されることはないと思うが、私有地の中にある磐座は、土地所有者に生殺与奪の権が握られているのである。

何とか、この貴重な文化財を本来の神域として復元・保護できないものであろうか。

三国岩の天文図

岩門の頂きに描かれた天文図が、どの星座を指しているのかについては、決め手がなくて長く判断に苦しんでいた。似てはいるが、北斗七星でもなくカシオペヤでもないと。ところが、ある時、三国岩の近くで働いている人が、恐ろしい岩があって自分はその恐ろしさに耐えきれず、職場を変

わったという話を聞いた。そこでその恐ろしき岩を訪ねて行くと、三国岩・岩門のちょうど道を隔てた南方に位置する大阪ガス会社の寮に出た。その広い庭を北に向かって奥に入って行くと、巨石が三石。良く見ると、それは琴座のベガと白鳥座のデネブそれにアルタイルを表現した岩だった。

目から鱗とはこのことだろう。やっと天文図の全貌が明らかとなった。この三石のうちアルタイルを除く二石は、歳差円（さいさえん）上の星で、小熊座のアルファー星を加えて、歳差円上の三つ星と言われている。歳差円は、天の北極にあって北極星となる星たちの軌道で、周期を約二万六〇〇〇年としている。現在の北極星は、小熊座のアルファー星であるが、その対極には琴座のベガがあるので、今から約一万三〇〇〇年後には、ベガが北極星になり、さらにその約三〇〇〇年後には、白鳥座のデネブが北極星となる。縄文古代の指導者たちはこのことを知っていて、どの星が北極星であったかを岩に刻んで、磐座の建設の時期を書き残した。それを一つの岩に刻んでいる場合が多く、天文石と呼ばれている。しかし稀には神籬を構成する岩や岩群をもって地上に大きく表示している場合がある。私の知る限りでは、九州山地の主峰・国見岳だけで、この磐座が他に比類なく尊い祭場であることを示している。ちなみに、それは、北に北極星となる目ぼしい星はないが、小熊座のアルファー星とベガが東と西に相対峙した時期を表示していた。[注⑥]

第五図　三国岩の天文図

私の間違いは、三国岩の天文図を一つの天文石としか見ていなかった点にあった。視野を広げて神籬全体を見渡さねばならなかったのだ。もちろん建設時のそれは現在の何倍も広く、南は先の三石を含んでいたに相違ない。

そこで何処にどのように歳差円が想定されていたか、また当時の北極星はどの星だったかを知るためには、先のベガとデネブの岩に加えて小熊座のアルファー星の岩を見つけねばならない。それは、まずベガの対極にありしかも北方角にあるはず。それを辿ると、何と、天文図のある三国岩の岩門に到達した。

第六図　三国岩天文図の示す北極星

そこで三国岩に戻って天文図を見直すと、確かにそれは小熊座で、小熊の尾の先には特別に大きな穴があり、これが当時の北極星であったことを示している。つまり三国岩の磐座が建てられたのは、現在と同じ小熊座のアルファー星が北極星であった時期で、それは今から一回り昔すなわち約二万六〇〇〇年前ということになる。（第五図）

荒深翁は、周辺の他の磐座に比して、三国岩の天文図は「余程古い」と言われていたが、その年数までは言及されていなかった。

二万六〇〇〇年前の北極星の穴は、正面（南面）を下から見上げると、一番上の巨大な磐の上部中心に大きく彫られていて、それは、まるで燦然と輝くばかりである。（第六図）

この論文は兵庫県神社庁発行の季刊誌「兵庫神祇」第572号より抜粋

参考文献および注

・荒深道斉「挙て磨け八咫鏡」弘報社発行　注①③⑤
・倉野憲司校注「古事記」岩波書店　注④
・「道ひらき」発行「やたのかがみ」紙、129号　注①
・中山和敬著「大神神社」学生社
・注②兵庫県神社庁発行季刊誌「兵庫神祇」第569号の『単一立石の磐座』に関する拙稿を参照されたい
・注⑥「兵庫神祇」第570号の『九州山地の主峰・国見岳の磐座』に関する拙稿を参照されたい